真面目であること―
それは中大生が誇るべき
尊い伝統です

4コマ漫画「コボちゃん」や「かりあげクン」の作者である植田まさし氏は中央大学文学部の卒業生。そんな国民的漫画家のご自宅（兼職場）をお訪ねして、植田氏が大学生だった頃の貴重な話をお聞きしました。

――先生が中央大学文学部へ入学した理由をお聞かせください

漫画家になる前は報道カメラマンを志していました。そのためには社会的な知識も必要と考え哲学科へ進みました。キャンパスは御茶ノ水にありましたが、私が入学した 1960 年代後半は学生運動の真っ只中、中央大学においても学費闘争が行われていました。

――とても勉強どころではありませんね

1 年次は群馬県安中で起きた公害問題をテーマにグループ学習などを行いましたが、2 年目からはロックアウトされていたため登校もできません。ですから大学へ行ったのは最初の 1 年と学生運動が沈静化した最後の 1 年、実質 1 年くらいでしょうか。

――卒業はどうされたのですか

その当時、学生運動の渦中で亡くなられた樺美智子さんのお父様・樺俊雄さんが教授を務めてられていて、ある時電話がかかってきたんです。先生を訪ねると本を渡されて、「これを読んでレポートを提出したら卒業させてあげますから」と（笑）。

――大学時代の一番の思い出は何でしょう

2 年目から写真の専門学校へ通い始め、習作のために学生運動の模様を撮り続けていたので、学生時代の思い出といったらそれくらい。ただ、おかげでクラスの結束は深まりました。本来なら専門分野に散っていくところ騒動のためクラスはそのまま、現在も同窓会を開いてみんなで集まっています。

――今大学生に戻るとしたら何を学びたいですか

文学部で役立つのはやはり語学でしょう。語学力を身につければ色々な職に就けますから。たとえば自動車のセールスなんて向いていると思います。大事なのは製品知識よりも人とのコミュニケーション。人と人との関わりの問題ですから、まさに文学部でのテーマです。

――先生から見た中央大学の印象はいかがですか

最も素晴らしいのは、中大生の真面目さ。私の時代には働きながら勉強する苦学生も多くいました。これは昔から変わらない中大の伝統ですから、今の若い方にもぜひとも受け継いでいってもらいたいですね。

文学部哲学科 1971年卒業
植田 まさし さん

1947年、東京都世田谷区生まれ。1982年、第28回文藝春秋漫画賞。
2016年、日本漫画家協会賞大賞。1982年から読売新聞に連載中の「コボちゃん」は2018年、36年目を迎えます。